

飛騨牛の可能性探る

岐阜大生と生産者ら議論 高山市

市民と岐阜大学生が地域の課題を議論する「ぎふフューチャーセンター」が、高山市冬頭町のJAひだ本店で開かれ、同大応用生物科学部の学生と飛騨牛生産者らが飛騨牛ブランドの魅力について意見を交わした。

同大とJA全農岐阜が取り組む「飛騨牛倶楽部」の課外学習の一環で行われた。同大が開講する「地域ブランドと地域振興」の講座で飛騨牛の歴史について学んだ同部の学生11人が、県畜産研究所(高山市清見町)などを見学、飼育や流通の現場を学んだ。

「ぎふフューチャーセンター」は課外学習最終日に市民と同大の学生が議論。飛騨牛の生産農家らと学生が今後の飛騨牛ブランドをどうすべきか意見を出し合った。

「霜降り具合ばかりが評価の観点になっていくが、健康志向の消費者に合わせた商品も

必要」「多彩なレシピの開発を」などの提案が出され、付せんで見えを分類しながら話し合いを進めた。今後は「学生が班ごとに議論を重ね、12月までに「若者から見た飛騨牛の魅力」をまとめる。」(大賀由貴子)



生産者らと飛騨牛ブランドについて話し合う
岐阜大の学生＝高山市冬頭町、JAひだ本店